

昭和大学がおくる、エデュケイテッドマガジン

EDUCÉE

エデュース

昭和大学海外医療協力派遣

マダガスカル

突撃!! 現場レポート
夜の病院を支える人たち

キャンパスのあるまち
烏山寺町

Vol.6

TAKE FREE

2012

Showa University



昭和大学

<http://www.showa-u.ac.jp>

Vol.6

2012

昭和大学がおくる、エデュケイテッドマガジン

E D U C E

エデュース



【educE】(英)は
(潜在能力を)引き出すという意味で、
「education=教育」の語源になります。
本誌ではいろいろな人の
奥深い才能を引き出し、
紹介していきたいと思っています。

Photo: 烏山妙寿寺「鍋島侯爵の旧邸」



C O N T E N T S

- The Doctor who SAVES a WOMAN P03
**女性に寄り添い、
 同じ目線で考える。
 乳がん治療の第一人者。**
 〈中村 清吾〉
- キャンパスのあるまち P07
寺院がつくる街並
 ～世田谷区北烏山 街の緑の景観を支える、烏山寺町。
- Medical cooperation team to Madagascar P11
**昭和
 大学 マダガスカル医療協力チーム**
 子どもたちの笑顔を取り戻すために。
- 突撃!! 現場レポート P16
夜の病院を支える人たち。
 灯りの消えない夜の病院現場から密着レポート
- Written by the doctor BOOK P21
『伝え上手な患者になる!』 医者と心を通わせよう。
 〈平松 類〉
- HEALTHY scene P22
**こんな場合に役立つ
 「連携歯科」**
 ～連携歯科のシステムで、安心・安全な治療!～
- 医療今昔 P25
妻沼 ～埼玉県熊谷市・妻沼地区～
地方近代医学のきらら
 坂田医院旧診療所／荻野吟子生誕の地
- 大学界隈のあの店 P28
 ～旗の台～ **亀屋岩崎商店**

◎プロフィール
中村 清吾(なかむら せいご)

1982年 千葉大学医学部卒業
聖路加国際病院外科
1997年 M.D.アンダーソンがんセンター
2003年 聖路加国際病院外科管理医長
2005年 聖路加国際病院プレストセンター長
2010年 昭和大学医学部乳腺外科教授
昭和大学病院プレストセンター長

UNIVERSITY HOSPITAL
BREAST CENTER

受付
Breast Center Information

とことん話を聞いて、
相手の立場になって考えること。

当時の一般外科の待合室には、ストーマケアで受診する高齢の男性もいれば、けがをして大声をあげて泣く幼児もいる。その脇で女性たちは、乳がんの診察をじっと待つしかなかった。「こうした環境を何とか改善しなければならなかった。ようやく年間200症例に近づいてきた頃、『プレストセンター』という聞き慣れない言葉が日本に入ってきた。いわゆる乳がん治療専門の診療センターです。そんなものが本場に可能なのか。自分の目で確かめて来よう」と

1997年、当時プレストセンターの準備を進めていた、テキサス大学M.D.アンダーソンへと単身渡った。中村は乳腺外科のエバシングルタリ教授に付き、診断から手術、薬物療法まで、ひとりの患者さんの流れに沿ってすべてを見せてもらった。さらにアメリカ国内の乳がん治療の施設を見学して回った。手術があると聞けば、コンタクトをとりすぐに飛ぶ。わずか4カ月ほどの間に26回も飛行機で米国内を移動した。

ひとりの患者さんの願いを
叶えるために

「患者さんが大切にしているものは何なのか。とにかく話を聞くことです」
昭和大学病院プレストセンター長、乳腺外科医・中村清吾。乳がん治療の第一人者である中村は、女性に寄り添うことこそ、乳がん治療の根幹だと語る。

THE DOCTOR WHO
SAVES a WOMAN

女性に寄り添い、
同じ目線で考える。
乳がん治療の第一人者。

乳がんのピークは他のがんに比べると低く、40代後半。妻として、母親としての役割、あるいは働いていれば役職の責務も大きくなる世代。そこにがんという病魔が重くのしかかる。
「精神的にも大きな負担を抱える患者さんと向き合い、徹底的に話を聞いて、相手の立場になって考え、ゴールへと最善を尽くすこと」
中村はその姿勢を崩すことがない。

BREAST CANCER
昭和大学病院プレストセンター長

中村 清吾

SEIGO NAKAMURA



思えば、研修医3年目。ひとりの患者さんとの出会いが、現在の道への始まりだった。そもそも学生時代、外科医を志してはいたものの、興味のあったコンピュータを活用できる移植や人工臓器の分野に進もうと考えていた。そのため、大学の医局に入らず、「あらゆる診療科のトレーニングを積めるように」と聖路加国際病院で6年間の研修の道を選んだ。

その研修3年目に出会ったのが、国内では前例のなかった「乳房温存手術」を希望する乳がんの患者さんだった。その頃、日本で乳がんの手術といえば、乳房切除術しかなかった。乳がんが見つければ、どんな場合でも乳房自体を全切除、周囲のリンパ節も一緒に切除する。乳がんイコール、乳房を失うこと。そう考えられていた時代に、ひとりの女性の切なる願いはその後の乳がん手術を変える可能性を秘めていた。

プレストセンターの
原型を求め、アメリカ
M.D.アンダーソンへ

一方で移植・人工臓器の分野は日本では一向に進まない。研修を終えた中村は一般外科へ入局。消化器の腹腔鏡手術を主としながら、乳がんの患者さ



乳がん治療に携わるすべての診療科の医師やコメディカルのスタッフが治療方針などを議論する。

「すべてを持ち帰る気でしたから。日本でセンターを立ち上げるなんて、まだ誰の承認も得ていませんでしたけど(笑)」

患者さん主体のチーム医療を 目の当たりにして

当時、日本には例がなかった「センチネルリンパ節生検*」という手法に大いに衝撃を受けたが、何よりも驚いたのが医療スタッフの働き方だった。

「回診のグループを見ると、みんな白衣を着ていて、どの人がドクターなのか分からない。患者さんの訴えを聞いて、その場で薬剤師がポケットから薬を出して処方したり、看護師が聴診器を当てて聴診していたり。それは標準治療に対する共通認識がしっかりとあるからこそ、できることなんです。これこそが『チーム医療』だ」と

あらゆる職種がひとりの患者さんのために考え方をともにし、それぞれがプロとして高いレベルの力を発揮する。医師を頂点としたピラミッド構造のままでは成し得ない。中村が思い描くレストセンターの原型がここにあった。

聖路加に戻った中村は、精力的に動いた。まず一般外科から乳腺外科を独立させ、日野原先生(聖路加国際病)

学部が揃う昭和大学は、とてもユニークな教育を実践しています。まさに私がやりたい『チーム医療』の可能性を感じました」

学部に関わらず、寮で寝食をともにし、連帯感や信頼感、お互いを思いやる態度を早くから身に付ける。2年次以降も学部合同の病院実習を展開している。中村の元に訪れる実習生を見ても、聖路加時代にはない、職種間の壁のなさを感じるという。

「看護学科や薬学部の学生が、医学部の学生に対して全然遠慮していない。非常にフラットな良い関係を早い時期から築いています」

可能性があるからこそ、一方で中村は若い世代を叱咤する。

「もつとアグレッシブにいろんなことに挑戦して欲しい。何となくできて目ももつと不満があつていい」

浅草で3代続く鍼灸院で育った中村。下町気質の人情は優しくて厳しい。自身も学生時代、多くの刺激を求めていた。東洋医学、スポーツにコンピュータ、移植・人工臓器…そして今、乳がんを抱える女性に寄り添う。

「がんは、なかなかしぶとい病気です。ある一定の確率で再発のリスクがあります。どうしても治療の限界という

***センチネルリンパ節生検**

乳がん手術の際、転移をふせぐため、がん細胞が最初に辿り着く「センチネルリンパ節」をまず見つけ、すぐに病理検査を行い、がん細胞が見つからなければ、その先のリンパ節は取らない手法。当時の日本では乳がんの手術をすると、すべての患者に対して腋窩リンパ節を取り除いていた。そのためリンパ浮腫や手が挙げにくくなることも少なくなかった。

SHOWA UNIVERSITY HOSPITAL BREAST CENTER



昭和大学病院 プレストセンター

チーム医療で治療に取り組む、患者さん中心の医療体制

乳がんの診断、治療を目的に、医師、看護師、薬剤師、臨床検査技師、放射線技師、遺伝子カウンセラー等、あらゆる専門家が関わりながら、「患者さん中心の医療」の理念に基づき、チーム医療を実践している。



センター内にある「リボンズハウス」。乳がんに関する情報収集や、患者さん同士の交流が行える場となっている。医療スタッフや専門家による治療と生活に役立つサポートプログラムも開催している。

まさに私がやりたい『チーム医療』の可能性を大いに感じた。



マンモグラフィ2台(1台は側臥位ステレオガイド下マンモトム対応)、超音波検査装置3台(カラードップラー、エラストグラフィ対応)、骨塩量測定装置が患者さんの動線に配慮して設置されている。



院理事長)の協力を得て、2005年に念願のプレストセンターを発足させた。

昭和大学 プレストセンターを設立 若い世代への チーム医療教育を実践

「乳がん治療は最低でも10年。再発の可能性を考慮すれば、患者さんと生涯つきあっていく治療です。仮にいま私が手術をした患者さんなら10年後、私はもう定年です。患者さんを継続的に診ていくためには、若い世代の育成は不可欠です」

治療方法も切除を主とした外科治療だけでなく、薬物治療、放射線治療、形成外科による乳房再建術まで多岐にわたる。一人ひとりの患者さんに合わせたきめ細かな対応と、職種間の連携が鍵となる。

「医療者の卵、つまり学生の段階から全身を見る力、コミュニケーションの力を培う必要がある」

2010年、昭和大学病院プレストセンター立ち上げを機に、中村は教育者としても新たな役目に挑戦する。

「1年次の全寮制など、医学部・歯学部・薬学部・保健医療学部の4つの医療系



寺町が つくる 街並み



Karasuyama "Tera-machi"
The town of a temple

街の緑の景観を支える、烏山寺町。

烏山病院から寺町へ向かって

新宿から京王線で約20分、千歳烏山駅の北側に昭和大学附属烏山病院がある。昭和26年に開設されて約60年を経たが、周囲にはツツジ緑地や農家の屋敷林も残り、緑の多い閑静な場所である。

さらに北に向かって歩いていくと、「烏山寺町」と呼ばれる寺院が集まった地区がある。この烏山寺町は大正12年(1923年)の関東大震災によって焼け出された、あるいはその後の整備計画

により、下町にあった寺院が集団で移転してきた。

大正15年までに浅草、築地、荒川区、港区などから6寺、そして昭和4年までに16寺が移転し、さらに昭和30年までに麻布、渋谷区などから4寺が移り、現在26寺院がこの寺町を形成している。

今日ではそれぞれの寺院が植えた樹木たちが大きく育ち、静かで緑濃い佇まいとなっており、東京の「小京都」とも呼ばれるような歴史と自然豊かな地域として、散策の地となっている。

◆高源院 鴨池(弁天池)
目黒川の水源である湧水の池の中央に弁財天を祀る浮御堂がある。冬にはシベリアから鴨が飛来してきたことで知られ、初夏から秋にかけてはツツジ、スイレン、秋草などが美しく彩り、人々の目を楽しませてくれる。世田谷区の特別保護区に指定されている。



武蔵野の農村の外れに建設

寺町が形成され始めた大正13年といえ、世田谷区では上北沢住宅街などの新興住宅地が造られ、成城学園の校舎建設が始まった頃。郊外へ都市機能の広がりが、どんどん世田谷が切り開かれた時期でもある。

当時、烏山は東京府北多摩郡千歳村字烏山と呼ばれ、江戸時代に整備された玉川上水により農業が発達し、水田や麦畑、桑畑、茶畑が広がっていた。周辺の村々に比べて水に恵まれた烏山村は人口も多く、最も多い生産高を誇っていたという。水路には水車が掛けられ、精米、製粉なども行われていた。

大正2年の京王線の開通は市街化の契機となったが、寺町がおかれた場所は当時の幹線道路の甲州街道からかなり外れた地区で、雑木林と荒地が広がる一画。そこに寺が一つ、また一つと建てられ、徐々に寺町としての形が整えられていった。

さまざまなる宗派、古今著名人の墓も

現在26ある寺院の宗派はさまざまだが、ゆつくり巡ると見所も多い。例えば、妙寿寺の客殿は明治期の鍋島侯爵邸を移築したもの。幸龍寺境内には「君が代」の歌詞にある「さざれ石」が

置かれている。

一風変わった碑が稱往院の門前にある「蕎麦禁止」の石碑。浅草にお寺があった頃、参詣客にふるまった蕎麦が評判となり繁盛したが、修行の妨げになるからと、禁止にしたものだ。また、妙祐寺はインド様式の本堂で、何とも不思議な雰囲気を感じている。

源正寺には地域風景資産でもある「釜六の天水桶」がある。天保4年(1833)太田氏釜六の銘があり、江戸

時代に11代続いた名高い御用鑄物師の作である。寺町の最北に位置する高源院の「鴨池」も烏山寺町の象徴的な池となっている。

これらのお寺の墓地には著名人のお墓も多い。専光寺には江戸後期の浮世絵師の喜多川歌麿、妙善寺には歌麿と同時期の人情本作家の為永春水、永隆寺には落語家の6代目三遊亭圓生の墓がある。その他にも古今の知る人ぞ知る人の墓がたくさんある。



高源院の庭園



専光寺
浮世絵師
喜多川歌麿の墓

町人文化が栄えた文化文政期、美人画で人気を博した浮世絵師。文化3年(1806)年没。寺院とともに墓も移転され、都の旧跡にも指定されている。

享保4年(1719)太田近江大掾藤原正次の作。近江辻村鑄物師の系統で、「釜六」とも称し、源正寺の天水桶も、代は違うが同じ工房の作である。関東大震災の時に火災に包まれ、破れた穴が痛々しい。

妙寿寺
関東大震災で
破損した梵鐘



客殿は明治期の鍋島侯爵邸を移築したもので、世田谷区指定文化財に指定されている。

妙寿寺
鍋島侯爵の
旧邸



玄照寺の竹林



稱往院のあじさい

変わらない街の風景を守り続けて。

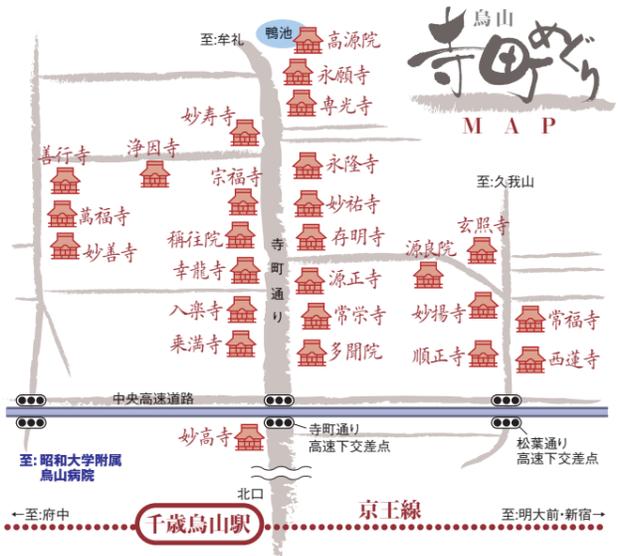


お寺の景色は誰もが変わって欲しくないもののひとつだろう。

春のサクラ、秋の紅葉をはじめ、四季折々の風情を楽しめる烏山寺町。この辺りにはサクラやマツ、ツゲをはじめ、200種類以上の樹木がある。この豊かな雰囲気は寺院関係者や地元の人目に見えない部分での頑張りがある。この烏山寺町は日本で最初に住民自らの手で地域の自然環境を保全することを宣言した「環境協定」を制定した地域だ。

特に「地下」と「高さ」には十分に配慮している。この辺りの寺には今でもそれぞれ井戸が2つか3つくらいある。お寺の生活用水、檀家の人が墓参りに来て井戸を汲む。この地下水は樹木にとっても貴重な恵みでもあり、地下室などの地下水が枯渇する恐れがある建物は建てることをルール化している。また、建物の高さも樹木への日照や景観に影響を与えるため、話し合い譲り合ってまとめる。おかげで寺町の環境は今日まで保たれている。

世の中の変化につれて、どんどん新しくなるものがある。その一方で変わらないもの、変わって欲しくないものがある。高い屋根と大きな樹木、静かな佇まい。お寺の景色は誰もが変わって欲しくないもののひとつだろう。



幸龍寺
「君が代」の
歌詞にある
「さざれ石」

学名は石灰質角礫岩と呼ばれる。石灰質が雨水に溶解して粘着力の強い乳状体となり、多くの石を集結して次第に大きくなったもの。



《 昭和大学附属 烏山病院 》
多様な精神科疾患の治療に対応できる都市型精神科病院としての設備を整え、その役割を担っている。許可病床数381床。



子どもたちの笑顔を取り戻すために。

昭和大学マダガスカル医療協力チーム



**聖夜のひと言が
マダガスカルへ**

「マダガスカルで医療支援をするおつもりはありますか？」

形成外科医・土佐泰祥は、2年前のクリスマススイップにそう話し掛けられた。声の主は作家の曾野綾子氏である。

その日、曾野氏の自宅に招かれていた土佐は、かねてから発展途上国への病院建設の支援プロジェクトに参加している曾野氏から、マダガスカルのアンツィラベへ

胎児のときに唇や口蓋が癒合せずに裂けた状態で生まれてくる。通常は生後に手術を行うが、マダガスカルではほとんどの子どもがそのまま成長していき、つらい思いをしている。

「自分が昭和大学で学んだ技術と知識がマダガスカルでも役に立てれば」

さうそく大学に働きかけ、マダガスカルへの医療協力が昨年実現した。そして2回目となる今年、土佐をリーダーとする9名の昭和大学医療協力チーム

にある病院の手術室建設の話聞いた。

アフリカのインド洋に浮かぶ島、マダガスカル共和国。国土面積は58万7千平方キロメートル、日本の約1.6倍の広さを有する。ほぼ真ん中に位置するアンツィラベ市は人口3番目の都市で、それ以南には大きな病院施設は皆無だという。形成外科医、とりわけ口唇口蓋裂を専門とする医師が不在という現状を聞き、心が動いた。

口唇裂・口蓋裂は先天性形態異常で、

昭和大学が、公益財団法人笹川記念保健協力財団の専門家派遣事業に協力し、マダガスカルに医療チームを派遣

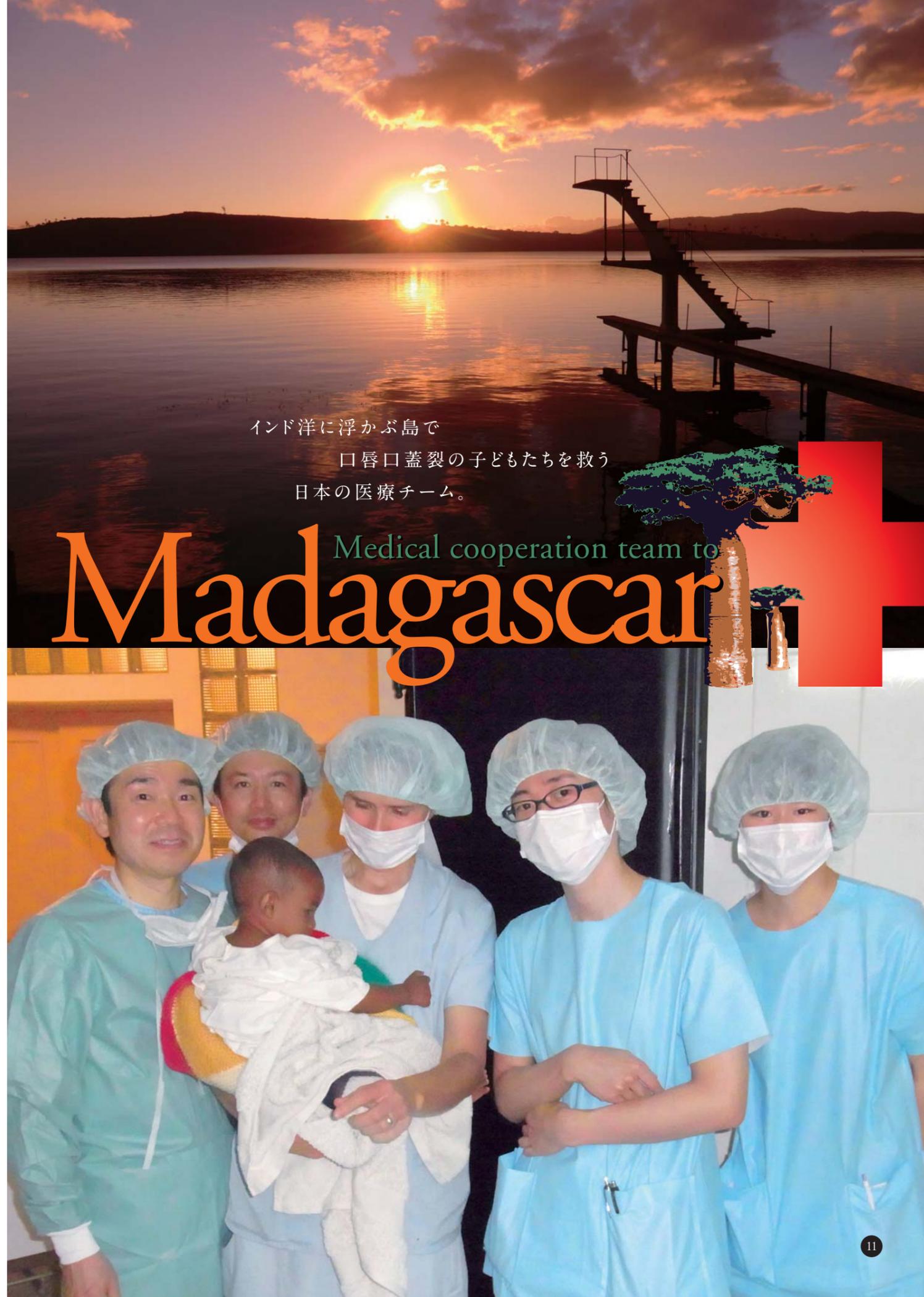
派遣期間 2012年6月12日(火)～23日(土) 12日間

Member

【医師】◎形成外科/土佐泰祥 准教授・黒木知明 助教
◎麻酔科/大塚直樹 講師・中川元文 助教

【看護師】小野寺千春(昭和大学病院)
志方舞衣(昭和大学藤が丘病院)
吉田 薫(昭和大学横浜市北部病院)

【学生】林 純一(医学部6年)
齋藤まなみ(保健医療学部看護学科4年)



インド洋に浮かぶ島で
口唇口蓋裂の子どもたちを救う
日本の医療チーム。

Medical cooperation team to Madagascar

アンツィラベでの最後の夜には現地のスタッフが晩餐会を開いてくれた。手づくりの食事で労をねぎらい合う。



修道会のシスター、現地の看護師も支援に加わった。左の写真はボランティアスタッフによる術前のシャワー風景。

Staff



活動拠点となったアヴェマリア産院。ここは、曾野氏の著書『時の止まった赤ん坊』の舞台のモデルでもある。



Hospital



Patient

口唇口蓋裂は食事や言葉にも支障があり、顔に変形があるため心のキズにもなりやすい。手術が成功した子どもや家族の嬉しそうな笑顔が、スタッフの何よりの喜びになる。



千春

「よりベストな状態で医療を提供していくためには、スタッフの体調管理も考慮する必要があります」(看護師 小野寺千春)

「よりベストな状態で医療を提供していくためには、スタッフの体調管理も考慮する必要があります」(看護師 小野寺千春)

「辛い、すべての患者さんをきれいに改善することができ、ご家族はもとより、見学に訪れていた海外の留学生たちも驚嘆するほどでした。しかし、たとえ無償で医療を提供するとしても、その質については一定の水準が担保されるべきだと強く感じました」(形成外科医 黒木知明)

「今回手術した口唇口蓋裂の子どもの中には、過去に他国の医療ボランティアグループにより手術を受けたものの、良好な結果が得られず、再手術を希望して来た人が複数いた。いずれも十分な知識、経験をもった医師が執刀したとは思えないものだったという。」

「普段裸足で生活している患者もいるため、ボランティアスタッフに術前にシャワーで全身洗ってもらい、その後タオルや湯たんぽで保温しながら手術まで待機してもらった。」

「現地の子どもたちは総じて栄養、活動拠点となるアヴェマリア産院(タリニクアヴェマリア)は聖フランシスコ会修道院内にある産科医院。到着後すぐに手術室の準備に取り掛かった。中庭にはすでに大勢の手術希望者達が集まっていた。その中には昨年「また来年ね」と声を掛けた子どもたちの顔もあった。」

「深夜に首都アンタナナリボに着いた一行は翌朝、アンツィラベへ向かってバスで移動した。」

「乗ったANA機がマダガスカル航空機の真横のスロットに駐まり、1時間ほどの驚異的なスピードで乗継ぎを完了させました。ANAの特別なオペレーションだったそうです」(麻酔科医師 大塚直樹)

「活動拠点となったアヴェマリア産院。ここは、曾野氏の著書『時の止まった赤ん坊』の舞台のモデルでもある。」

「(学生2名を含む)、加えて曾野氏とボランティアスタッフ8名が、アンツィラベ市において、口唇口蓋裂を抱える子どもたちへの医療支援を行った。」

「状態が悪い。低体重、低栄養のため手術を受けられないケースもあり、そんな子どもたちに「しっかり食べて体重を増やしてから、また来年おいで」と声を掛けた。」

「音楽に国境がないように、医療にも国境はありません」(土佐)

「音楽に国境がないように、医療にも国境はありません」(土佐)

「手術前は絶対に口元を押さえて見せなかつた女の子。無事に手術を終えるとはかみながらも口元の手術跡を見せてくれた。治療中、終始無言だった男の子は別れ際にどこで覚えたのか、アリアガトウと言ってくれた。」

「ただ行って、手術して帰るだけの支援ではなく、継続して行い、現地の医療スタッフの『医育』となることが重要なことです」(土佐)

「現地の手術には、医師や看護学部の学生なども見学に訪れる。昨年見学した国立アンタナリボ大学の若い医師の強い希望によって、今年昭和大学への留学が実現した。1年間、形成外科で口唇口蓋裂の手術手技を中心に研鑽を積んでいる。」

「支援を超えた、『医育』の重要性」

「シャワーや入浴の生活習慣がなく、何日も着替えを行わないなど、実際に手術を行う患者さんや家族と接して、不衛生な生活環境を目の当たりにしました」(看護師 吉田薫)

「限られた日程の中、ひとりでも多くの子どもたちの治療を行うため、1日3〜4件の手術が組まれた。電力事情も悪く、手術室には照明が蛍光灯1本と小さな无影灯2台しかない。夕方を過ぎると室内は暗く、針や糸の操作がスムーズにいかない。衛生面でも日本とのギャップに戸惑う。」

「ボランティアの質は、常に問われる」

「2年越しの子どもたちを含め、今年66名が診察に訪れ、23件の手術を行った。」

「(看護師 志方舞衣)」

「(看護師 志方舞衣)」



灯りの消えない
夜の病院現場から密着レポート

夜の病院を 支える人たち。

in 昭和大学 藤が丘病院

多くの人々が訪れる慌ただしい昼間の病院。
一方、夜の病院ではどのようなことが行われているのだろうか。
入院患者さんにとっては一時的ではあるもの、そこは生活の場。
さらに地域の住民にとっては、夜間の急患窓口としての機能をもつ。
そこで今回は横浜市青葉区にある
昭和大学藤が丘病院の「夜」を追ってみた。

Hospital of NIGHT



その言葉どおり、医療が国を越え、子どもたちの笑顔を取り戻す。「朝から夜までカンヅメでしたが、それが私たちのミッション。診療活動以外にもシスターをはじめさまざまな経験をお持ちの方々と触れ合えたことはとてもいい経験でした。ぜひまた参加したいです」麻酔科 中川元文
昭和大学医療協力チームのマダガスカル行きは今後も継続される予定である。

Town & Life of people

アンツィラベの町はフランス文化の影響が残されている。フランス料理のレストランもあり、キリスト教大聖堂や洒落た建物も見られる。子どもたちの人懐こい笑顔が印象的。



アンツィラベは国土中央部の高地に位置する。その気圧の変化で日本から持ち込んだ機材が故障するトラブルもあった。初冬の乾期であったため、日中は日差しが強いが朝夕は涼しい。夜には満天の星空が美しく、南十字星も輝き、天の川や流れ星も見えた。

参加した学生のMEMO ②

現地の人の生活に触れ、
考えさせられました。

保健医療学部看護学科4年 齋藤まなみ

マダガスカルでは保険に加入していないのが当たり前と知り驚きました。病院への受診率も30.7%で、約70%もの人々は病気になっても病院へ行かないそうです。そんな中、私は手術を受けた子どもの家に訪問させていただく機会がありました。部屋は2つしかなく、5人家族が住むにはとても狭い空間でした。電気も裸電球1つ、窓も1つしかないため、昼間でも薄暗い。でも、ここで料理を作り食事すると聞き、とても驚きました。その家は地面がコンクリートであったので、まだ裕福な家庭だと聞き、また驚きました。

今回、日本では当たり前と考えられていることは当たり前ではないということを実感させられるとともに、医療を受けることはみんなができる行為ではないということを知りました。この経験を生かし、柔軟に物ごとを考え、広い視野を持った看護師になりたいと思います。

参加した学生のMEMO ①

チームがひとつの
オーケストラのように!

医学部6年 林 純一

今回の活動で印象に残ったことは、現地での医療支援は医療チームだけでなくそれ以外のスタッフに支えられているということです。財団のスタッフの方々が手術を行う前に患者さんの体を洗ったり、歯を磨いたり、患者さんと家族への説明を翻訳してくれたりと事前に様々なことを手伝っていただいたおかげで、手術がスムーズにできるのだと感じました。土佐先生の「チームがひとつのオーケストラとなり、手術を成功させることができた」という言葉がとても印象的でした。

病院の手術室は想像以上にきれいで驚きました。働く看護師の人も一所懸命で熱意にあふれている方ばかりでした。その一方で、本来なら血のついた使用済みのゴム手袋は感染性廃棄物として破棄すべきですが、水洗いして再利用しようとするなど、現地のリスク管理の問題点を目の当たりにしました。



医師の夜間対応は、ER(救命救急外来)担当と当直と各診療科のオンコール(自宅待機)担当に大きく分かれ、当番制となっている。ERは、夜間は4名の医師が担当する。待機中は当直室で仮眠をとるなどしている。オンコール担当は診療科ごとの夜間担当医。基本的に自宅待機となる。「手術した夜の患者さんは状態が不安定なので、オンコールで呼ばれることもあります」。この日も呼吸苦がある患者さんに処置室で対応していた。こうした夜間の対応をスムーズに進めるためには、日頃から医師同士、看護師、薬剤師などの情報共有やコミュニケーションが大切だ。



ER対応と各診療科のオンコール対応

当直医師

夕食

地下の厨房から食事を載せたコンテナが上がってくるのが17時半頃。看護師が二人一組で食事内容をチェックする。特に注意が必要なのは「治療食」。治療食は看護師が患者さんに届ける。



4階西病棟 耳鼻咽喉科・泌尿器科・形成外科

Hospital of NIGHT 入院患者さんを支える病棟スタッフ

ここ昭和大学藤が丘病院は、病床数584床を数える横浜エリアの中核病院。20以上の診療科を構える総合病院では、受付時間を過ぎた夜もさまざまなドラマが繰り返されている。

4F西病棟の耳鼻咽喉科・泌尿器科・形成外科・皮膚科では56ある入院ベッドがほぼ埋まっていた。急性期医療が主となるここでは手術前後の患者さんが大半を占める。残りの2割程度が喉頭がんなどの長期入院の患者さんである。

病棟で頼りになるのは看護師だ。じっと息を潜める病室で、時に心細くなる夜。ナースステーションの灯りは、どれほどの安堵感を与えてくれるだろう。夜間の看護師は基本的

に4人。夕方から「申し送り」と呼ばれる引き継ぎ業務を行い、患者さんの夜に備える。

「点滴やバイタルチェックはもちろん、昼と夜とで患者さんの心身の状態が大きく変わることがあるため、細かな変化を見落とさないように気を付けています(白戸信行看護師) 急なトラブルが発生すると、必要に応じて当直医師に連絡をとる。ER(救命救急外来)担当か各診療科のオンコール(自宅待機)担当の医師が夜間対応を行う。

「万一のときにすばやく冷静に対応するためにも、日頃からの情報共有が大切です(耳鼻咽喉科 徳留早俊医師) 21時の消灯後。夕方から動き放しの看護師がひと休みできる時間だ。交代で休憩に入るが、どこかでナースコールが押される。

「トイレや、隣の方が気になって眠れないなどさまざま。一方で、家族にも言えないような悩みを患者さんが納々と話してくれることもあります(白戸) 夜だからこそ、患者さんの本当の顔が見えることもある。



夜間勤務の看護師(4名)は、昼間勤務の看護師からの引き継ぎから業務がスタートする。大体16時半頃から。特に手術当日の患者さんは容体に変化しやすいので、注意が必要。点滴や薬、特別な対処事項を患者さんごとに確認し、夜間のメンバーで情報を共有する。

申し送り(引き継ぎ)



引き継ぎがひと通り終わると、昼間の看護師と夜間勤務の看護師がペアになって、患者さんの病室を回る。「ウォーキングカンファレンス」と呼ばれるこの業務は、点滴の交換やバイタルチェックなど、患者さんを前にして確実に引き継ぎを行うためのもの。患者さんにとっても、安心材料となるはずだ。

ウォーキングカンファレンス

医師の回診

主治医による回診。科の担当医師も同行し、患者さんの状態をキャッチアップしていく。回復具合や何か変わったことがないか患者さんの顔色を診ながら一人ひとり問診を行う。やはり、気になるのは今日手術をした患者さんだ。



消灯

検温や点滴パックの確認や、寝る前の薬を飲ませたり、トイレ介助などを終ると、21時に消灯。患者さんにとってはこの時間の病室は、最も孤独感が高まる時間かもしれない。「中には夜にナースコールを押すことを躊躇する患者さんもいらっしゃるので、注意深く見るようにしています」



特に手術後など、患者さんによっては消灯後も数時間おきにバイタルチェックを行う必要がある場合もある。



ナースコールが鳴ると、看護師のPHSに転送され、そのまま話ができるようになっている。病室番号もPHS画面に表示される。

病棟以外でもあらゆるセクションで患者さんを守っている。



緊急用の処方調剤や医薬品補給に対応

少し意外に思う人もいるかもしれないが、薬剤部も眠らない部門だ。夜10時以降でも病棟の看護師が窓口で薬を受け取りにやってくる。「夜間、急に患者さんへの投薬が必要になった場合などに対応しています。各病棟より連絡があると直ちに調剤して病棟に払い出しています。夜間はスタッフの人数も減っているので、一つ一つ確認しながら確実にを行っています」もちろん、救急対応にも常時備える。また劇薬も含め、数百種類の薬の管理も大きな役割である。

薬剤部



心臓カテーテル室

心筋梗塞の患者さんの緊急オペが発生。当直の診療放射線技師をはじめ、臨床工学技士もオンコールで呼ばれ、すぐに駆け付けた。「血液が詰まっている箇所を特定して取り除くためのオペの準備です」。PHSで連絡を取り合いながら、患者さんの状況と、こちらの準備状況の連絡を取り合う。数分で準備を整えると、慌ただしく患者さんが搬送されてきた。

緊急オペにも冷静かつすばやく対応



放射線部

容体が急変した入院患者さんや、ERに運ばれてきた患者さんの緊急検査に対応する。CT撮影から画像処理まで、わずか5〜10分。今夜も既に3名ほどの患者さんが運ばれ、当直の3名の技師たちが慌ただしく対応していた。そうこうしている間にまた電話が鳴り、緊急オペのため心臓カテーテル室に呼ばれていった。ハードな部門である。



Hospital of NIGHT 一刻を争うシビアな場面を支える人たち

救命救急センターの働きは、近年のドラマでもお馴染だが、そこでは放射線部の技師の働きが欠かせない。例えば、心肺停止で運ばれてきた患者さんのCT撮影をすばやく行い、リアルタイムで画像処理を行う。緊急処置に欠かせない患者さんの検査情報だ。「夜間はERか、病棟で容体が急変した患者さんの対応がほとんどです」(放射線部 鈴木義曜技師)

薬剤部もERや病棟からの緊急オーダーに夜間も対応する。そして、忘れてはならないのが病院という建築物そのものの安全を支えている人たち。不審者や侵入者を防ぐ守衛、さらに電気ガス水といった院内のライフラインすべてを管理する防災センター。いずれも24時間365日体制で監視を続けている。

患者さんが安心して眠れるように、地域の住民の方々が安心して暮らせるように、さまざまな所で働いている人たちがいる。夜の病院はけっして眠ることがない。



セキュリティの最前線

守衛室(夜間受付)

夜間は総合受付窓口となる守衛室。代表電話も夜間はここに掛かってくる。通用口のため、昼間以上に部外者や不審者が侵入しないよう、人の出入りに注意している。「夜は他の人の目が少ないですから」。監視カメラのモニター確認や各病棟・各フロア、各部屋の巡回など。院内の安全を守るためチェックに抜かりがない。また各部屋の鍵の管理も行う。



3次救急医療施設として、急性心筋梗塞および心不全、脳血管障害、重症外傷、急性中毒、重篤な代謝性障害、呼吸不全、出血性ショック、肺血症などの重症症例を年間1,200名ほど受け入れている「救命救急センター」。夜間も当直の医師や看護師をはじめ、多くの医療スタッフが常時待機している。この夜は幸いにも、緊急搬送される患者さんは少なかったものの、一刻を争う「命の現場」には、独特の緊張感が漂っている。



静かな夜も独特の緊張感

夜間救急(救命救急センター)

当直室

最新式のカプセルタイプの当直室。ベッド数は全28。当直医はもちろん、医療スタッフ、医学部の臨床実習生も利用する。常時9割は埋まっているという。



カプセルホテルのような清潔な休息空間



病院のライフラインをコントロール

防災センター(機械室)

電気・ガス・水道など、病院内の全フロア・各部屋のライフラインの管理を行っているのが、地下1階の「防災センター」だ。ここでは火災報知機やエレベータの稼働状況、コンピュータによる電気・ガス・水道の監視・管理を行っている。機械室には真夏は40度にもなるというボイラー室や高圧の変電室などがあり、「止まってはいけないところ。まさに24時間365日眠らない部署」。その他にも台風や積雪などの災害対応や、病院内の電気製品の一次修理対応もこの防災センターが対応している。

昭和大学 藤が丘病院





こんな場合に役立つ 「連携歯科」

～ 連携歯科のシステムで、安心・安全な治療! ～

「連携歯科」って何? 大きなケースを耳にしたことはないだろうか。近所の歯医者さんに親知らずを抜いてもらおうと思ったら、横に生えているので「ここでは難しい」と言われ、大きな病院を紹介された。こうした地域の歯科医院が対応しきれないような難しい治療を引き受けるのが、大病院などに代表される総合病院の「連携歯科」である。こうした連携システムの背景のひとつには、歯科の領域の広さがある。「医者の内科、外科、眼科などは馴染みがあるでしょうが、実は歯科の世界も領域が分かれています。口腔外科、歯を残すための保存科、入れ歯を作る

補綴科など、かなり細分化されています」(昭和大歯科病院副院長・連携歯科 佐野晴男) さらに医学の進歩と高齢化が歯科治療を複雑化している。「重い病気を抱える方が歯科治療を希望するケースが増え、病気との関連を考慮しながら、然るべき歯科治療を行う必要があります」(佐野) 地域の歯医者さんにしてみれば、そもそも自分の専門領域外の患者さんが来院することもあり、加えて、病気を抱える患者さんも増えてきた。自分では対応が難しいが、何とか患者さんを助けてあげたい。そんな時の「駆け込み寺」が「連携歯科」というわけだ。

巷に歯医者さんはたくさんあるけれど、いったいどの歯医者さんに行ったらよいのだろうか。特殊なケースや持病がある場合でも対応できるのだろうか。そんな不安を解消してくれるのが、地域の歯科医院と連携している、総合病院の「連携歯科」だ。難しい治療も、持病を抱えている人の治療にも対応できる。トラブルを起こさないためにも、上手な歯科治療の受け方を知っておこう。

監修



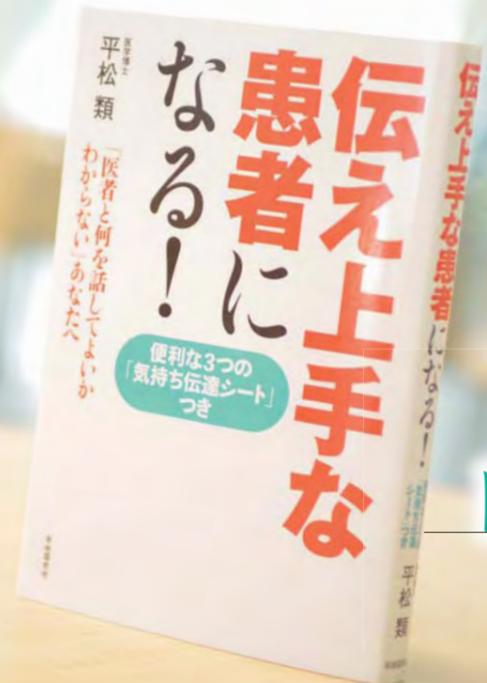
昭和大歯科病院 副院長
連携歯科診療科長

佐野 晴男

平松 類(ひらまつ りい)



昭和大学医学部卒業。
郡山市今泉西病院、昭和大学病院、
米沢市三友堂病院眼科科長を経て、
現在は昭和大学病院附属東病院
眼科助教。



医者と心を通わせよう。

平松 類『伝え上手な患者になる!』

～「医者と何を話してよいかわからない」あなたへ～ (自由国民社)

医者と十分な意思疎通ができていないまま、手術などの大きな治療を受けてしまうことはないだろうか。

本書はそうしたギャップを解消するために、医者と患者の「心の結末」を提唱する。充実したコミュニケーションを築くことを目的に、患者が伝え上手になるための「気持ち伝達シート」をはじめ、豊富な実践例を交えながら、後悔しない治療の受け方を指南する。

— この本を書いたきっかけを教えてください。

私はもともと聞き下手な医者で、「本当は目薬が欲しかったのに言い出せなかった」「以前から違和感があったが、どう言ってもいいかわからなかった」と患者さんから言われることがありました。そんな中、私が関わった研究で「患者さんが病気を知り、医者とうまく話すこと」で大きな治療効果を得られることがわかったのです。

ある時、「余命も長くないが、医者が手術を勧めるのだから受けなきゃいけないのだろう。でも本当は迷っている」という患者さんにこの方法を試してもらいました。すると、その患者さんは手術をせずに痛みもなく幸せに過ごせるようになりました。ただ勧められたからという理由だけで手術をしていたら後悔

することになっていたかもしれません。また「もう治らない病気だ。私の痛みはどうしようもない」と諦めていた患者さんに試してもらって、病気が治り、痛みがとれ、歩いて買い物に行けるようになったのです。

もっとうまく医療を利用していただければ、良い人生を過ごすことができるのだらうと思ひ、私自身の経験をもとにこの本を書きました。

— 研究の成果である「気持ち伝達シート」の効果や利点はどのような所でしょう。

医者の前に立つと緊張してしまう人がほとんどです。また、医者は忙しそうでなかなか話を聞いてくれないことがあります。そんな時に必要なことを的確に話すということは、医者である私にも難しい。そこで「書く」ということに注目したわけです。実際、うまく治療を受けて利用している人の中に自分の思いや経過を書いて来る方がいらっやいました。話をするとボヤけてしまうことも、書いてあれば焦点がはっきりして言いたいことが伝えられる。何より「言いにくいこと」を伝えることができます。お金の話や仕事の話、恥ずかしくてなかなか言えないようなことも、伝えやすかつ確実に伝えます。

— 患者さんに一番のアドバイスは?

「医療は完全ではない」ということです。だからこそ「伝え方次第で良くも悪くもなる」「不治の病が2年後には治る病気に変わった」といったことが起こります。医療は日々変化していくものです。「医療はだめだ」と投げ出すのは簡単ですが、「健康は幸せの9割を司る」と言われるように、私たちの人生にとって重要なものです。いい点も悪い点も含めて医療を人生にもっと役立てて欲しいと思います。



©撮影：内田 強

トラブルを未然に防ぐために

とはいえ、自分には何か配慮の必要があるのだろうか? という声もあるだろう。しかし、知らないと思わぬトラブルにつながる場合も少なくない。そこで、いくつかのケースをまとめたので参照していただきたい。

昭和大学歯科病院の場合、紹介されてくる患者さんは、やはり冒頭の難しい親知らずの抜歯が一番多いという。続いて多いのが、歯科恐怖症の患者さんの治療。その他に心臓病や高血圧、糖尿病、脳梗塞、認知症の患者さんや麻酔アレルギー、障害をもつ患者さんといった、いわゆるハイリスクな患者さんの治療を引き受けている。

「からだ全体との関わりの中で最適な歯科の治療を行うため、あらゆる専門分野の歯科医師、あるいは医師と連携しながら実施しています」(佐野)

こうしたからだ全体と病気との関わりの中で歯科治療を行うスキルは、今後の歯学教育の課題でもあるという。「これからの時代のニーズに添えていくには、病気や薬などのトータルな知識をもつ歯科医師を育成していかなければいけません」(佐野)

昭和大学では医学部・歯学部・薬学部・保健医療学部の4学部合同の学習を通して、より幅広い知識とスキルの

育成に取り組んでいる。

スムーズな地域連携のために

最後に連携の流れについて少し触れるが、「連携歯科」を受診する場合、地域の歯科医院からの「紹介状」が基本となる。しかし、歯科の世界では医者のような文書による紹介状が浸透していないのが実情だ。場合によっては、「どこか大きな病院に行ってください」と言われた人もいるかもしれない。

「それでは地域連携は成り立たない。歯科医師同士が顔の見える信頼関係づくりが大切です」(佐野)

ちなみに昭和大学歯科病院では紹介状がなくても直接受診できる。

また、地域の歯科医院から紹介された場合、依頼された治療が終了すると、患者さんを地域の歯科医院に戻すのがルールだ。

「地域の歯科医院が危惧するのは、大病院に紹介したつぎ患者さんが戻ってこないのではということ。患者さんの取り扱いについては、地域連携は上手いできません。お互いの得意分野を尊重しながら補い合い、情報やスキルを共有し合い高めていく。お互いがハッピーになれる連携こそが、結果的に患者さんにとって一番満足いく治療なのですから」(佐野)

こんな場合に役立つ「連携歯科」

～ 連携歯科のシステムで、安心・安全な治療! ～

知っておきたい!

障害を抱える方



大きな病院の総合歯科などでは、障害者対応を行っている。目が見えない、耳が聞こえない、話せないなど、患者さんの状態に合わせて、筆談やCCD画像による視覚的な診断など、きめ細かに対応してくれる。認知症同様、歯科治療を諦めないで、相談してみることが大切だ。



妊娠中および妊娠の可能性がある方

安定期に入れば、特に注意は必要ないが、妊娠初期、つわりがひどい時期は薬の服用は避けるべきだ。歯科医院での問診の際には、妊娠中(その可能性がある場合も)の旨を必ず申告しよう。

骨粗しょう症予防薬を服用している方

いわゆる「BP製剤」。この薬を服用している人は必ず歯科医師に申告すべき。健康な人の抜歯のケースに比べて、骨粗しょう症の予防薬を服用している人は「骨髄炎」になるケースが高い傾向にある。1万人に3、4人の割合で発症するといわれ、一度、骨髄炎になると、なかなか治りにくい。放っておいた虫歯の周辺から骨髄炎になることもある。原因は口腔内のばい菌。常に口の中を清潔に保つことが必要。必要に応じて、歯科医師および薬剤師に相談してみよう。

歯医者さんに行く前に

こんなケースはどうすればいい!?



麻酔アレルギーの方

過去に麻酔によって気持ちが悪くなった、過呼吸症になった等の症状が出た経験がある人は必ず申告しよう。薄めの麻酔液から段階的に濃度を高めていくなど、症状に合わせた対応が必要となる。

心臓病、高血圧の方



心臓病、高血圧を抱える人で、現在、脳梗塞予防、心筋梗塞予防のために、抗血小板薬(血液がサラサラになる薬)を服用している場合は必ず歯科医師に申告すること。これらは抜歯の際、血が止まりにくくなるが、大抵一晩程度で止血する。つまり、然るべき止血を行えば、抜歯しても大丈夫。

最も危険なことは、抜歯をするからといって、抗血小板薬の服用を一時的に止めてしまうこと。脳梗塞、心筋梗塞のリスクを高めてしまうからだ。

歯科恐怖症、麻酔注射が苦手な方

歯医者がどうしても苦手、あるいは歯茎への麻酔注射が苦手という人は、「静脈内鎮静法」を試してみよう。麻酔ほど強くなく、いわゆる酒に酔ったような酩酊状態を薬の効果で作出す。トロンとしているうちに治療が終わるため、恐怖症の人には何とも有り難い治療法だ。ただし成人および高齢者向けで、小児には適さない。

連携歯科等で相談してみよう。



認知症の方

上で紹介した「静脈内鎮静法」が効果的。認知症の患者さんに全身麻酔を行うと、認知症の症状が進行してしまう恐れがある。静脈内鎮静法ならば、そのリスクを回避することが可能だ。

認知症のため、歯科治療を諦めていた患者さんのご家族の方は、一度、相談してみよう。口腔内のケアは患者さんのQOLを高めるためにも効果的である。

Information

昭和大学歯科病院 連携歯科(総合歯科)

地域の医療機関との連携をより深めるため、2009年4月に発足した診療科。地域の歯科医院では対応が難しい方々の治療を引き受け、安全かつ快適な治療を実施している。

〒145-8515 東京都大田区北千束2-1-1

■最寄駅/洗足駅、北千束駅

■お問い合わせ/03-3787-1151

■受付時間/初診(月～金曜)8:30～15:00、(土曜)8:30～10:30

【主な対象疾患】

◎歯科治療恐怖症、歯ぐきへの麻酔注射が苦手な方

◎口の型を取るとするとこみ上げてしまう方

◎障害をお持ちの方

◎高血圧・心臓病などの循環器疾患、重篤な糖尿病、腎透析中の方

◎脳卒中中抗血栓薬服用中の方

◎認知症、薬剤アレルギーをお持ちの方

◎その他、歯科治療を受けるに当たって何らかの差し障りがある方すべて

埼玉県北部、利根川のほとりの旧妻沼町は
平成17年に熊谷市に合併した。
古くは水運交易で栄え、肥沃な平野には作物が豊かに育ち、
聖天山の門前町を中心に地域文化が開花した。



妻沼

めぬま ～ 埼玉県熊谷市・妻沼地区 ～

地方近代医学の

まら



建 坂田医院旧診療所

地元を驚かせた
近代化の象徴、
いまはロケの名所に

妻沼(めぬま)聖天山の門前町に、忽然とモダンな洋風建築が現れたのは昭和6年。「田舎にすごい建物ができた」と評判になったという。

産科内科医院として多くの患者さんで賑わった「坂田医院」は、東京の建築会社による当時流行のオール・テコ様式で、前面に大きく張り出した玄関ポーチが威風凛々を見せている。華麗な内装とともに、最先端の医療機能が備えられ、訪れる患者さんを驚かせた。

また鉄筋コンクリート造りは関東大震災後、地震に弱い煉瓦建築に代わって増えた工法で、コンクリートの躯体を覆う外壁は「スタッコチタイル」。櫛で引っ掻いたような溝をつけた装飾チタイルで、これは旧帝国ホテルに使われてから、この頃に大流行して多くの建物に用いられた外装である。

ただし都市の建築とは違ってこちらは平屋建。左右にゆったりと低く棟を広げているのが、のんびりとした地元の風景には似合っている。

開業した坂田康太郎医師は、昭和49年の冬の夜に往診先で倒れて亡くなるまで、地域の医師であり続けたという。その後は坂田晃医師に引継がれ、昭和61年まで使われていた。現在も内部は当時

のまま、古い医療器具とともに残され、廃院のリアルな雰囲気を出している。足を踏み入るとひんやりとした空間が浮かび、何やら異次元に迷い込んだような気がする。

この独特な建物はじつは「ロケの名所」でもある。古くは昭和43年テレビドラマ『流水の女』に始まり、近年は映画『東京タワー オカンとボクと、時々、オトン』の撮影にも使用された。以降、『ゲゲゲの女房』(映画)、『孤高のメス』(映画)、『南極大陸』(ドラマ)など、映画やドラマのほかバラエティからCMまで、ロケが後をたない。

平成16年には国登録有形文化財に指定された。現在は熊谷市が管理し、県民の日やイベント時など、限られた日のみ内部を一般公開しているが、今年度に修復工事の計画が立ち、今後は定期的な公開も検討される。

訪れた日は有志の方々が敷地に花を植え、草とりなどの手入れを行っていた。診療所は地元の人たちにも思い出深い建物、その記憶とともにいつまでも医院であった日の尊厳をもった場所であってほしいと思う。



7年の大修理でよみがえった
極彩色のユートピア
国宝「**歓喜院聖天堂**」

いま熊谷のホットスポットは「妻沼の聖天山」。日本三大聖天として古くから信仰を集める。今年本殿が国宝に指定されることになり、地元がわき上がっている。

聖天堂は江戸時代中期の1760年に完成した。装飾建築の成熟期にあたり、工人の技術を駆使したおびただしい彫刻で埋め尽くされている。

花々が咲きみだれ、果樹がたわわと実り、幻の神獣に守られたうつくしい楽園。そのなかで神仏も子どもも楽しげに遊ぶ平和な世界が彫刻で現わされる。たとえば吉祥天と弁財天が双六遊びに興じているところを、毘沙門天ののぞき込む。毘沙門天がいつも足元に踏んでいるはずの邪鬼はするりと抜け出て、横でにんまり手招きしている。邪鬼すらも幸せなパラダイスである。

無彩色のほうが上品では?と思う方も、ぜひここでは極彩色だからこそ表現できる世界を堪能していただきたい。「彫刻」という物質性を超えたイメージーションに引き込まれる。この中に住みついてしまいたい...そう思ってしまうのは現代人だけでなく江戸時代の庶民も同様、きっと憧れのまなざしで見とれていたに違いない。

立体感と奥行きを見事に現わした高浮き彫り、精巧な透かし彫り、緻密な地紋彫り、隅々まで魂のこもったパワーに感嘆する。



DATA 妻沼 聖天山 歓喜院

【所在地】熊谷市妻沼1627
【アクセス】JR熊谷駅から「聖天前」行きバス約25分
◎本殿彫刻拝観は700円
(同伴者のいる中学生以下は無料)



DATA 坂田医院旧診療所

【所在地】熊谷市妻沼1420
【アクセス】JR熊谷駅から「聖天前」方面行きバス約25分、「妻沼下町」バス停前。
【問合せ】熊谷市役所妻沼行政センター 産業建設課 TEL.048-588-1321
※内部の公開日はお問合せください。



日本初の近代女医
荻野吟子
生誕の地

不屈の精神で、
日本近代女医たちは誕生した。

明治18年に日本で初めて、女性で医師の国家資格を取得した荻野吟子。次々と立ち上がる困難を乗り越えていくその生涯は、小説『花埋み』（渡辺淳一）や舞台『命燃えて』などに作品化された。熊谷市依瀬（旧妻沼町）、吟子の生家



「荻野吟子記念館」の展示室と外観

の跡地には「荻野吟子記念館」があり、その業績を伝えている。

吟子は嘉永4年（1851）に名主の家に生まれ、少女時代から利発で、妻沼宿の「両宜塾」に通い、秀才ぶりを発揮した。しかし「女子には過ぎたる才能」といわれるのが関の山で、18歳（以降かぞえ年）で嫁いだその年に時代は明治になった。その後間もなく、夫から性病を移された挙げ句に離縁となり、東京の病院に入院する。このとき、男性医師に診察される苦痛を味わい、同じ境遇の女性たち、またそれが厭わしくて

治療を受けずに悪化するものが多いことを憂い、女医になるという固い決意をしたのである。その後、東京女子師範学校の1期生として入学、明治12年に首席で卒業した。いよいよ医学校に進もうとするが、その門戸は女学生には閉ざされていた。なんとか下谷の好寿院医学校への入学がかない、やっと29歳で

年以後試験にも合格して、ここに日本初の公許女医の誕生をみたのである。

すでに近代女性医師たちが世に出ようとする潮流は止められないというねりとなっていた。合格こそしなかったが、吟子と同じ年に受験を志した女性には他に3名おり、その後は続々と女性が合格する。1回目は過労で倒れて受験できず2番手として合格した埼玉県深谷の生沢クノも、断髪男装で医学校に通い、苦学を強いられ、試験願書を出しては却下されるという同じような道をたどっている。このような女性たちの先鋒に立つことになっ

たのが荻野吟子である。吟子の生家のすぐ裏は利根川。いまでも広い河川敷の向こうに滔々とした流れが見える。医師になるまで戻らないという決意をもって、この川を船で下り帝都へ向かってから15年、やっと志を遂げて帰ってきたとき、吟子は35歳になっていた。川は水運交易の富と作物の実りをもたらしたが、低地では度々水害に見舞われた。そのたびに泥を掃き出す「水片付け」に苦勞したこの周辺の女性は「水場の女」と呼ばれ、我慢強い働き者が多かったという。吟子もこの気質を受継いだのだろう。

医学の端緒につくことができた男子学生の擲論や妨害の中でも、猛勉強に励み3年で卒業。しかし、またしても女性という理由で国家試験である医術開業試験の受験が許されず、2年間にわたって、内務省や県に嘆願書を提出する。ようやく明治17年、願書が受理されて前期試験に合格、翌

その後は東京で念願の開業をしたものの、病の治療をしているだけでは社会の底辺にいる女性の根本的な救済にはならないと、クリスチャンの立場から社会活動に力を入れた。やがて理想郷建設の夢想にとりつかれた年若い夫を追って、医師のキャリアを棄て北海道へ渡ることになる。

生涯ついてまわった努力と苦勞は、医師としての成功をつかむためのものではなく、人々を助けるために。その潔さこそが、吟子らしい信念ではないだろうか。

DATA

熊谷市立
荻野吟子記念館

【所在地】
熊谷市依瀬581-1
【アクセス】
JR熊谷駅から
「葛和田」行きバス約30分、
「土手上」下車、徒歩20分。

◎入館無料 ◎9時～17時
(通常月曜・年末年始等休館)

めま観光ガイドボランティア

阿うんの会



会長の鳴原壽子さん

聖天山の
貴惣門

聖天堂でガイドしてくれるのが「阿うんの会」のみなさん。国宝指定が決まってからテレビでも取り上げられて拝観者が急増し、フル回転の活躍だそう、それぞれに個性のある心のこもった解説が評判。

今回、荻野吟子記念館も会長の鳴原壽子さんにご案内をいただいた。聖天山の貴惣門の彫刻の中には、荻野家の寄贈名が彫られたものもあるという。この門は吟子の生まれた同じ年に竣工している。

大学界隈のあの店

早朝から営業する、
街の小さなおにぎり屋さん。

旗の台

『亀屋 岩崎商店』



人気メニューの「おにぎりセット」

コンビニもいいけど、
たまには
飾らないもてなしと
家庭の味を。

先代から店を引き継いで、この旗の台で30数年。東口商店街の小さなおにぎり屋「亀屋」。

「今はみんなコンビニで済ませちゃうからねえ」。そう笑うのは店主の岩崎康男さん。それでも1日300個以上のおにぎりが売れる。人気の具はシャケとたらこ。新潟産の厳選したお米、シャケは市場から直送だ。6時40分の開店に合わせて、毎朝3時半に起きて仕込みを始める。「もう何十年もこのスタイル。おかげで腰を悪くしちゃって。ゴルフもやめちゃった(笑)」

店内には6席ほどの小さなカウンターも。人気メニューの「おにぎりセット」は、おにぎり2つとみそ汁に小鉢とお新香がついて450円。朝8時半までなら早朝割引で400円とお得だ。コンビニもいいけれど、ゆっくり座って、温かいみそ汁を啜りながら食べるおにぎりは、ひと味もふた味も違うはず。

お団子やおはぎ、大福などの甘味もこのお店の売れ筋。1年ほど前からはランチタイムに丼物(400～700円)も始めた。「試行錯誤だよ。だいぶこの頃、味が落ち着いてきたかな(笑)」

飾らない言葉が、家庭的であたたかい。旗の台といえ、昭和大学をはじめ、文教大付属高、香蘭女学校などがある文教の街。たくさんの若者が、亀屋の前を通過して、学び舎に通い、成長していった。卒業しても顔を見せる客も少なくない。「『国家試験受かったよ』ってわざわざ報告に来てくれたり、その後、お医者さんになって結婚して『子どもが生まれたよ』って子ども抱いてまた来てくれたり。嬉しいですよ」と奥様の正子さん。

昔に比べると、商店街の景色も随分と変わった。「『まだやってたの?』なんて言いながら、十数年ぶりに顔を出すお客さんもあるよ(笑)」

変わらない店構えと飾らないもてなし。小さなこの店は、誰かの懐かしいこの街の景色そのものだ。「別に特別なことは何もしてないんだけどね。お客さんを大事にすることぐらいかな」



人その友のために己の命を損つるは
是より大なる愛はなし

(ヨハネ伝 15章13節・吟子愛唱の聖句)



編集後記

広報の仕事に携わるなかで、日々痛感するのは、「伝える」ことの難しさです。伝えたい想いは溢れているのに、上手くそれが伝わらないこともしばしば……。今号の誌面づくりを通して、「伝える」とはどういうことなのか、わかってきたような気がします。

まず自分を知ること。すなわち「自分が本当に伝えたいものは何かを知る」ことです。そのうえで「どうすれば相手に理解してもらいやすいか」と相手の立場になって考えること。「伝える」とは、伝える側と伝えられる側のコミュニケーションがあってはじめて成り立つものではないでしょうか。

今号で紹介した本、『伝え上手な患者になる』にも、伝え方次第で病気が良くも悪くもなると書かれています。読者のみなさんにも是非読んでいただきたい一冊です。

本誌に関するご意見・ご感想を
下記アドレスへお寄せください。

educ@ofc.showa-u.ac.jp

EDUCE —エデュース—
第6号 2012年8月

◎発行／**昭和大学**
〒142-8555 東京都品川区旗の台1-5-8
TEL:03(3784)8000(大代表)

◎編集・制作／(株)教育広報社



“まごころ”を
こめて

昭和大学は「至誠一貫」を建学の精神として、
1928年に創立されました。
現在、4学部を擁する医系総合大学として、
社会に優れた人材を送り出しています。



Shōwa
医系総合大学
昭和大学